

【研究・教育報告】

授業改善のための学生アンケートの回答率向上と 回答結果活用 of 事例報告

村 上 広 史

本報告は、筆者が授業を担当する6つの空間情報関連専門科目（空間的思考、空間調査・測定法、空間情報学基礎Ⅰ及びⅡ、空間の利用と立地、並びに空間分析）、並びに2つの必修科目（基礎演習Ⅰ及びⅡ）の計8科目について、授業改善のために2022年度後期より行っている学生へのアンケート回答率向上の取組と、その回答結果の活用事例を紹介するものである。なお、空間的思考、空間の利用と立地、並びに基礎演習Ⅰの3科目は週1回の半期授業、基礎演習Ⅱは週1回の四半期授業、その他は週2回の四半期授業である。

事例紹介に先立ち、青山学院大学（以下、「青学」）が現在実施している「授業改善のための学生アンケート」（以下、「学生アンケート」）の現状と、筆者が学生アンケートを実施した際の課題を整理する。なお、青学は、2024年度より新しい学生アンケートの内容と実施方法を導入したが、本報告はそれ以前に実施されていた学生アンケートに関する事例の紹介である。

1. 学生アンケートの現状

(1) 実施方法

青学は、学生によりよい授業を提供し、教員が授業改善を図ることを目的として、学生アンケートを無記名式で毎学期末に実施している¹。学生アンケートの対象は、学部・研究科の開講科目（一部の研究科、演習等を除く）である。また、その内容は、選択式及び自由記述式で構成され、全学部統一の設問・回答項目となっている。

学生アンケートの実施時期は、各学期末の期末試験期間を含めた2週間程度である。このため、青学の地球社会共生学部（以下、「地球学部」）において学期の前半に四半期単位で開講されている科目を履修した学生は、授業期間内に学生アンケートに回答することができない。

（2）実施結果の取扱

学生アンケートの結果は、全ての回答（選択式回答及び自由記述式回答）について次の学期開始直前に各授業担当者へ報告されている。また、各学部・研究科等で決定した方法に基づいて選択式回答のみが集計された結果は、青学の学生及び教職員に学内限定で開示されている。地球学部の場合は、選択式の回答結果のみを科目ごとに教員名を明記して開示している。ただし、他の学部・研究科では、教員名を明記していない場合もある。さらに、選択式回答のみを各学部・研究科全体で学期ごとに集計した結果は、青学のWEBサイト上で一般に公開されている。

（3）回答率

学生アンケートの回答率は、2022年度後期の専任教員担当科目の平均回答率において青学全体で7.2%、地球学部で4.6%であった²。

（4）授業改善の取組

学生アンケートの目的である教員による授業改善に関しては、青学は授業改善計画の提出を求めるなどの、具体的な取組を教員に対して義務化していない。このため、授業改善に関してはすべて教員独自の対応に委ねられている。

2. 学生アンケートの課題

前述の現状を踏まえ、筆者が自ら授業を担当する科目の授業改善に、学生アンケートを活用しようとする際の課題を述べる。

(1) 結果報告時期の非合理性

学生アンケートは、前述のように、学生によりよい授業を提供し、教員が授業改善を図ることを目的として実施されている。そして、教員が授業改善を積極的に行おうとすればするほど、当該科目のシラバスの内容は変更される可能性が高くなる。一方、シラバスは、学生が各授業科目の学習を進める上での基本的な指針であって、科目履修を決める際の重要資料であり、実際に行われる授業内容との整合が重要である³。したがって、もし、教員に学生アンケートの結果を用いて授業内容の改善を期待するならば、学生アンケート結果の教員への報告は、教員によるシラバス入稿締切前に十分な時間をとって設定されている必要がある。しかし、青学の場合、2022年度までの後期の学生アンケート結果の教員への報告は3月以降⁴であり、シラバス締切の1月下旬には間に合わない。

(2) 開示内容と対象の制限

学生アンケート結果のうち、学生に開示されるのは選択回答項目のみに限定されていて、記述式の回答内容は含まれていない。一方、記述式の回答は、将来科目履修を検討する立場の学生に対しては、シラバスだけでは分からない有用な情報を提供する。なぜなら、記述式の回答には、学生が実際の授業を通して学んだことや改善すべきと考えたことが学生自身の目線と言葉で書かれているからである。そして、青学は多数の科目を開講しているため、学生はそれらの科目全てを卒業前に履修できるわけではない。そのため、学生アンケート結果の記述式回答が学生に公表されないまま、学生がシラバスの情報のみで本当に履修したい科目を選択できるかについては疑問が残る（木野 2004：33）。実際、民間が提供する大学の授業のクチコミサイトは、履修登録時の授業選びに役立つことをうたい文句にして、授業の内容や学べたことに関する学生のコメントを記述式で会員に公開している⁵。これは、シラバスだけでは学生が必要とする情報が提供されておらず、学生のコメントの重要性を示唆するものである。同様のクチコミサイトは海外にも存在しており⁶、そのため、一部の

大学が授業評価の結果を学生に開示するようになってきているという指摘もある（Hanover Research 2014：4）。したがって、選択回答項目だけでなく、記述式回答についても学生へ開示することが望ましい。

また、一般向けには、学部・研究科ごとに学生アンケートの選択回答項目が集計されて各項目の平均値のみがWEBサイトにより公開されている。しかし、個々の科目の学生アンケート結果については青学からは一切公開されていない。また、個々の開講科目の実施計画はシラバスとして学外にも公開されているが、その実施状況は一般には公開されていない。したがって、個々の科目が適切に実施されたかについての客観的な資料は、学外には公開されていない。

（3）低い回答率

学生アンケートは、特定の講義を履修したすべての学生を対象にしつつ、学生の自由意思により回答されるものであり、無作為標本抽出の結果として回答者が決定されるわけではない。一方、Richardsonは、授業アンケートに回答する学生と回答しない学生の間には系統的な差異が存在し、統計的な処理は適さないと指摘している（Richardson 2005：406）。したがって、低い回答率の学生アンケートの結果を用いて、当該科目の授業評価について標本統計に基づく推定を行うことは不適切である。実際、Graduate Careers Australiaは、授業アンケート結果の一般公開に関する規範を設け、回答率が50%未満の公開を原則禁止している（Graduate Careers Australia 2010：6）。一方、青学全体での学生アンケートの回答率は、2022年度後期において専任教員担当科目においてのものが7.2%、兼任教員担当科目においてのものが12.2%に留まっている⁷。したがって、授業改善に向けて具体的な改善方針を検討する上で、青学のこれまでの学生アンケートの結果に関して、一部の学生による限定的な意見という位置づけを超えた取扱をするのは不適切である。このため、学生アンケートを授業改善に役立つようにするために、回答率の改善が課題となる。

回答率を全学的に改善することは、容易ではないかもしれない。しかし、公立大学法人宮城大学は、2016年度に20%台だった回答率を2019年度には大学

全体の平均で90%台に改善し、2023年度前期の全学回答率については97.7%を達成している⁸。宮城大学がどのような方法で回答率を向上させたかについての資料は入手出来ていない。しかし、このような前例があることを踏まえれば、10%前後となっている青学の現在の回答率を、例えば50%以上に改善していくことは、十分達成可能であると考えられる。

(4) 地球学部 of 四半期授業期間と学生アンケートの実施時期の不整合

前述のように、地球学部が前期に開講する四半期授業は、学生アンケート実施の前に終了するため、四半期授業科目の学生アンケート回答率は構造的に低くなる可能性が高い。しかし、これは地球学部のみの特長事情であり、青学全体の課題ではないため、地球学部として独自の工夫が必要になる。

3. 課題解決のための取組事例

本節では、前述の課題解決を図るために筆者が行った取組事例を紹介する。

(1) アンケート実施方法

前述の課題のうち、低い回答率に関しては、学生がアンケートへの回答に対して元々意欲が低い状況にあることが原因の一つであると想定される。その場合、学生アンケートへの回答を学生任せにしたままでは、回答率の向上は期待できない。そこで、筆者が担当する授業については、2022年度前期から四半期授業科目も含めて最終回授業の一つ前（第14回）の授業中に5～10分の時間を取って、アンケートを実施することとした。その際、当日の授業の提出物の説明の前にアンケートを実施し、学生が回答するまでは提出物の内容が分からないようにした。また、2022年度後期からは、青学の学生アンケートのシステムを用いて学生に回答させるのではなく、学生アンケートと同一内容のアンケート（以下、「同一内容アンケート」）を独自にGoogle Formsで作成して実施した。その理由は、同一内容アンケートの回答結果を速報として取りまとめ、改善等対応が可能と考えられる事項について最終回授業で履修生にフィー

ドバックするためである。同一内容アンケートに協力した学生への謝意を表すと同時に、担当教員として授業改善に向けた積極的な姿勢を示し、学生のその後のアンケートへの協力意欲を高めることを意図している。なお、青学の学生アンケートと同様に、同一内容アンケートは無記名で行った。また、成績には一切反映されないことと、結果を後述のように次年度のシラバスに公表することを事前に説明している。

授業中にアンケートを実施する前の回答率と実施後の回答率を比較するため、新型コロナウイルス感染拡大後に学生アンケートが再開された2020年度後期から2023年度後期までのアンケートへの回答率を表1に示す。表1において、2020年度後期から2021年度後期までは、青学の学生アンケートに授業外に回答するように指示していた。その際の回答率は、11.1%から100%の範囲にわたり、全体の平均は37.3%に留まっていた。一方、2022年度前期に青学の学生アンケートへの回答を授業中に行かせたところ、回答率は72.7%～92.9%の範囲に収まり、全体の平均は85.0%であった。授業中に実施したことで、前年度までの回答率を大きく向上させることができた。ただし、ほとんどの学生は青学の学生アンケートへの回答の仕方を理解していなかったため、途中で回答を断念した学生も存在していた可能性があり、さらなる回答率の向上が期待できた。そこで、2022年度後期以降は同一内容アンケートを準備し、授業で使用するGoogle Classroomのサイトから容易に回答できるようにしたうえで、授業中にアンケートを実施した。その回答率は81.3%～100%の範囲に収まっており、全履修者数に対する回答者総数の割合（平均回答率）は92.6%であった。このように、回答しやすくしたアンケートを授業中に実施することで、回答率を大きく改善させることができた。

同一内容アンケートの改善方針のみの結果をまとめた資料（以下、「アンケート結果」）の具体例を付録1及び付録2に掲載する。いずれも筆者が担当した後期授業の専門科目「空間の利用と立地」のアンケート結果であり、付録1が2022年度後期、付録2が2023年度後期のものである。

同一内容アンケートは、実施直後に回答結果を入手できるため、後期授業で

あっても、シラバスの締切前に回答内容の分析と授業改善点を検討するための時間を十分確保することが可能であった。例えば、付録1の2022年度後期のアンケート結果では改善点がいくつか指摘されたため、改善方針を追記している。この中で、学生から指摘があった改善点の一つに、経営と立地に関する話題の追加要望があった。そのため、災害に関する授業の代わりに経営と立地に関する授業を追加することとし、2023年度授業計画の変更をシラバスの締切前に登録することが可能であった。なお、付録2に示した2023年度後期のアンケート結果では改善点の指摘が無かったため、改善方針は追記していない。また、この講義（「空間の利用と立地」）の総合評価は、2022年度後期の4.67から2023年度後期は4.92に向上した。履修学生やその数が異なるために、この総合評価改善の要因を改善方針の実施のみに帰着させることはできないが、改善方針の実施が一定の貢献をしたことは十分考えられる。

一方、学期末に行うアンケートとは別に、学期の中間（第7回又は第8回）の授業において、簡易な内容の中間アンケート（以下、「中間アンケート」）も実施している。これは、学期中に授業の改善を図るために中間アンケートを実施する大学が増加しているという指摘を踏まえたものである（Hanover Research 2014：15）。具体的な質問事項は、何を学んだか、最も影響を受けたことは何か、どんなスキルが向上したか、並びに学期後半に向けた改善点の4つで、すべて記述式である。この中間アンケートも授業中に5分程度の時間を学生に与えて実施している。同じ科目でも、履修学生は毎年度異なるため、彼らのニーズにできるだけ対応するという点で有効な取組である。例えば、中間アンケートでは、授業で使用する資料の言語について、内容をよく理解できるように英語だけでなく日本語も加えて欲しいという要望が出されることが多い。その場合には、学期後半の授業において日本語を追記した資料を使用するようにしている。

なお、これら2つのアンケートは授業中に実施するため、教員が教室内にとどまったままで行われる。また、学生による回答の進捗を確認するため、教員は学生が回答中に教室内を歩き回る。もちろん、教員が学生の回答内容をのぞ

き込むことはない。一方、Benton and Cashinによれば、教員が教室内に留まる場合には学生の評価が高くなる傾向があるという指摘があるため、学生による真の評価を得るという観点では望ましい実施方法とは言えない（Benton and Cashin 2011：9）。しかし、表1に示すように、アンケートの回答を授業外に実施することを指示した場合、高い回答率を達成することは現時点では困難である。したがって、アンケートに対する学生側の協力意識が改善するまでは、授業中に実施することはやむを得ないと思われる。ただし、授業中に実施した場合、当日欠席した学生からの回答を期待することは難しい。欠席者に対して後日口頭で回答を促しても回答されない場合が多いため、欠席者の協力を得ることが今後の課題である。

表 1. 2020 年度後期から 2023 年度後期までのアンケート回答状況

年度・学期	科目名*	履修登録者数 (人)	回答者 数 (人)	回答率 (%)	実施 アンケート	実施 方法	平均 回答率 (%)
2020・ 後期	空間分析	9	1	11.1	学生 アンケート	授業外	37.3
	空間利用	46	6	13.0			
	基礎演習Ⅱ	19	6	31.6			
	小計	74	13	17.6			
2021・ 前期	空間的思考	56	37	66.1			
	空間調査	10	5	50.0			
	空間基礎Ⅰ	10	3	30.0			
	基礎演習Ⅰ	18	18	100.0			
	小計	94	63	67.0			
2021・ 後期	空間分析	13	5	38.5			
	空間利用	56	11	19.6			
	基礎演習Ⅱ	18	3	16.7			
	小計	87	19	21.8			

授業改善のための学生アンケートの回答率向上と回答結果活用の事例報告

2022・前期	空間的思考	56	47	83.9	学生アンケート	授業中	85.0
	空間調査	11	8	72.7			
	空間基礎Ⅰ	14	13	92.9			
	基礎演習Ⅰ	19	17	89.5			
	小計	100	85	85.0			
2022・後期	空間分析	10	10	100.0	同一内容アンケート		92.6
	空間利用	38	36	94.7			
	基礎演習Ⅱ	19	19	100.0			
	小計	67	65	97.0			
2023・前期	空間的思考	56	49	87.5			
	空間調査	10	9	90.0			
	空間基礎Ⅰ	7	6	85.7			
	基礎演習Ⅰ	21	20	95.2			
	小計	94	84	89.4			
2023・後期	空間分析	11	11	100.0			
	空間利用	16	13	81.3			
	空間基礎Ⅱ**	6	6	100.0			
	基礎演習Ⅱ	21	20	95.2			
	小計	54	50	92.6			

*：文字数の多い科目名は省略して表示している。空間利用：空間の利用と立地；空間調査：空間調査・測定法；空間基礎Ⅰ：空間情報学基礎Ⅰ；空間基礎Ⅱ：空間情報学基礎Ⅱ
 **：空間情報学基礎Ⅱは、履修登録者数が少なかったため、2020年度から2022年度までアンケートは実施しなかった。

(2) 同一内容アンケート結果の活用事例

記述式回答も含めた同一内容アンケート結果の全体（以下、「全結果」）を、2つの方法により活用した。一つ目は、前述のように最終回の授業における学生へのフィードバックである。具体的には、学生から改善すべきと指摘があっ

た事項を抽出して、次年度の授業での改善方針を説明した。アンケートに協力した学生への謝意を示すとともに、授業改善への積極的な姿勢を示すことで、アンケートに対する学生の協力意識を高めることを目指している。ただし、グループ討議を円滑に行うためにPC教室の亚克力板を撤去して欲しいなどのように、個々の教員レベルでは対応できないものについては、学内の担当部署に照会したうえで困難な理由の説明を学生に行っている。

二つ目は、次年度のシラバスへの掲載である。青学のシラバスには、授業関連情報を掲載することができる。そこで、その欄に全結果のURLを掲載している⁹。その際、シラバスはインターネットで一般公開されているため、全結果についても一般からの閲覧が可能となるようにアクセス制限を調整している。

全結果をシラバスで公開する目的は2つある。第一の目的は、学生に対して履修すべき授業を検討する際に役立つ情報を提供することである。シラバスで提供される開講科目の情報は教員が提供する情報であるため、教員目線での表現になりやすく、学生にはなじみのない専門用語が使われる場合もある。特に、地球学部では多様な専門分野の授業が開講されているため、シラバスだけでは学生が授業内容を十分理解できない可能性がある。しかし、前述のように、同一内容アンケートの記述式回答は学習内容や改善点が学生目線で書かれているため、シラバスの内容を補完する役割を果たすことが期待できる。

シラバスへの全結果の掲載が実際にシラバスの理解に貢献したかどうかを検証するために、2023年度の初回の対面授業においてシラバスに関するアンケートを実施した。その結果を図1に示す。この図から、ほとんどの学生が全結果について何らかの役に立ったと回答していることが分かる。ただし、このアンケートに回答した83名の学生のうち、シラバスに掲載された前年度の全結果を読んだのは38名(46%)に留まった。学生側は、全結果がシラバスに掲載されていることを事前に知らされたり、目を通すことを指導されたりしていたわけではない。そのため、全結果を読んだ学生の割合が低いことはやむを得ない。しかし、この取組を今後も継続していくことで、学生が履修前に講義内容

に対する理解を深めることができるようになり、シラバスの有効な活用に繋がっていくことを期待したい。

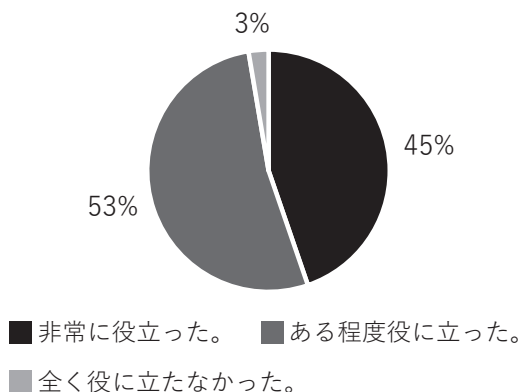


図 1. 筆者担当講義のシラバスに掲載した同一内容アンケート結果（全結果）の有用性に関する 2023 年度授業履修者へのアンケート結果（ $n=38$ ）

第二の目的は、授業実施と授業改善に向けた取組に関する透明性を高め、学生や納税者への説明責任を果たすことである。青学の授業は、学生が納入する学費と国庫からの補助金などによってその経費が賄われている。また、個々の授業内容を説明するシラバスは青学のWEBサイトにより、学生だけでなく一般に公開されている。しかし、それぞれの授業が実際に適切に行われたことを証明する客観的資料は一般に公開されていない。そこで、全結果と改善方針を一般に公開することで、個別の授業が実際に適切に行われたことを客観的に明らかにすることができると考えられる。もちろん、全結果の公開だけで学生や納税者への説明責任を完全に果たせるわけではない。それでも、高い回答率の全結果は、個別授業の実施状況に関する客観的な根拠資料として合理的なものであり、その提供は個別教員レベルで容易に実現可能である。また、学生アンケートの回答結果は、教員による授業改善の取組に役立つことがこれまで研究で明らかになっている（Richardson 2005：410；Marsh 2007：358；Benton and Young 2018：10）。そのため、全結果に改善方針を追記して公開することで、

教員が授業内容の改善に積極的に取り組んでいる姿勢を学生や納税者に対して明らかにするうえでも役立つと考えられる。

ただし、学生アンケートの回答結果については、その内容を教員の評価や教員間の比較に用いることの危険性や、他のさまざまな評価指標の一つとして用いることの重要性が指摘されている（Benton and Young 2018：10）。また、さまざまな学術団体によって、単独で評価に用いるべきではないことなど、取扱上の留意点がまとめられている（例えば、American Sociological Association 2019：1）。そのため、公開の重要性を前提としつつ、公開された回答結果の取扱においては、これらの点に十分配慮することが肝要である。

4. まとめと今後の課題

本報告を通して、授業改善のための学生アンケートの回答率向上と回答結果活用に関する事例を紹介した。まず、授業改善のためのアンケートを独自の回答方法により授業中に実施することで、学生の回答率を平均で37%台から90%台に向上させることができた。また、高い回答率が得られたことで、回答結果と授業の改善方針をシラバスを通して一般に公開できたとともに、次年度に履修を検討した学生のシラバス理解の向上に役立てることができた。さらに、青学と同一内容のアンケートを独自に実施することで、回答結果を実施直後に分析できるようになり、協力した学生に対して学期内に謝意を伝え、改善方針を説明することが可能となった。このように、授業実施と授業改善への取組の透明性を高めたことで、学生や納税者に対する説明責任を一定程度果たすことができたと考えられる。

今後の課題は、授業を欠席した学生からもアンケートへの回答を得られるようにすることである。また、個々の教員が独自にアンケートを実施する場合、教員が回答結果を改竄する可能性が残るため、回答結果の真正性を担保できるようにすることも今後検討していく必要がある。

参考文献

- American Sociological Association (2019) *Statement on Student Evaluations of Teaching*.
- Benton, Stephen L. and Cashin, William E. (2011) "Student Ratings of Teaching: A Summary of Research and Literature," *IDEA PAPER #50*, IDEA.
- Benton, Stephen L. and Young, Suzanne (2018) "Best Practices in the Evaluation of Teaching," *IDEA PAPER #69*, IDEA.
- Graduate Careers Australia (2010) *CODE OF PRACTICE*. Australian Graduate Survey.
- Hanover Research (2014) *Best Practices in Using Aggregate Course Evaluation Data*.
- Marsh, Herbert W. (2007) "STUDENTS' EVALUATIONS OF UNIVERSITY TEACHING: DIMENSIONALITY, RELIABILITY, VALIDITY, POTENTIAL BIASES AND USEFULNESS," in Raymond P. Perry and John C. Smart ed., *The Scholarship of Teaching and Learning in Higher Education: An Evidence -Based Perspective*, Springer. pp.319-383
- Richardson, John T. E. (2005) "Instruments for obtaining student feedback: a review of the literature," *Assessment & Evaluation in Higher Education*, Vol. 30, No. 4, August 2005, pp. 387-415.
- 木野茂 (2004) 「学生による授業評価アンケートを授業の改善にどう生かすかー大阪市立大学における 10 年間の実施結果をふまえてー」『大阪市立大学大学教育』. 1 巻 1 号、7-34 頁。

付録 1：2022 年度「空間の利用と立地」アンケート結果（良かった点及び改善すべき点と改善方針；学生のコメントは原文のまま）

この授業の良かった点、改善すべき点について書いてください。	改善方針
宅地建物取引士の資格取得に向けて勉強していたので参考にすべきことがたくさんありました。	
教授の説明が分かりやすかった。	
毎回グループディスカッションがあり、他の学生との交流も深まった。意欲的に参加する学生も多かった。	
グループワークが多く、初対面の学生と話す練習に役立った。色んな意見を聞けて、勉強になった。	
序盤の経営と理知に関する話題をもっと深掘りしたかった	「経営と立地」に関する授業を2023 年度から一つ増やすことにします。
グループワークについての理解しづらい時があったので、もう少し簡単に説明していただきたいです。	グループディスカッションの際の質問が分かりにくいということだと思われますので、スライドに日本語を追加する等により具体的な説明に努めます。
毎回グループディスカッションを行うため、授業に集中することが出来てよかった。	
ほぼ毎回学年を超えてかつ違う人とグループディスカッションができた点が良かった。	
授業の内容が比較的わかりやすく、難しいと感じることはあまりなかった。スピードもちょうど良く、課題も少ないため、負担にならず、授業内容を楽しむことができた。	
先生が巡回してくれたのでわからないことをすぐに聞けた。コースパワー主体がいい	
案外コミュニケーションしづらい	
授業の良かった点は毎回グループのメンバーが違うので新しい人との出会いを作る気付けになった。さらにディスカッションが多かったため、授業の内容を深く理解することができた。	

授業改善のための学生アンケートの回答率向上と回答結果活用の事例報告

出席を評価のメインにしているのは、学校に足を運ぶ気力になるのでも良かった。改善すべき点は（仕方のないことです…） パーテーションやパソコンがディスカッションにおいて少し邪魔に感じた。	
毎回グループメンバーが変わって話す機会も設けられるため、様々な人と話さなければいけない環境に置かれることでコミュニケーションをとることや自分のグループワークでの立場など様々なスキルが身につけられて良かったと思う。	
受講者の意見をあらゆる視点から見る事ができたこと。先生が意見を否定しなかったことが、この授業の良いところだと思った。	
良かった点としては、スライドが見やすく、授業内で難解な説明がなかったことです。毎回の授業を理解することができ、そしてクラスメイトと考えることで思考力が身についたように思います。 改善点としては、使用する資料とその目的が簡潔にまとめられたシートのようなものが欲しいです。	授業の資料を要約したものを2023年度から授業後に配布します。
身の回りの事象について勉強するため、分かりやすい講義であった。また、これからの生活に役立つ内容であった。	
毎回発言をすることでアウトプットができた	
この授業では実際の土地を例に挙げて授業が進んでいくため、授業の名前通り空間をどのように利用すればよいのか、どのような立地が良い場所であるのかをイメージしやすかった。グループワークでも実際の土地を利用したのは良かったと思う。	
良かった点は、いろんな人とコミュニケーションがとれたこと。改善すべき点は、特になし。	
よかった点：講義型の授業と違って退屈にならない 改善すべき点：毎回グループディスカッションをする前に軽く自己紹介をする時間を設けると、議論がより活発になるのではないかと思った（アイスブレイク的な感じ）	2023年度から授業の始めにアイスブレイクの時間を設けます。
グループでの話し合いが多く、退屈せずに授業を受けました。	
グループで話し合うことで、様々な人の意見を聞くことができ、自分にはない発想や考えを知るきっかけになった。	

青山地球社会共生論集

体系的でわかりやすかった。 毎回の質問が少し抽象的すぎて答えづらいことがあった。	2023年度からスライドに日本語を追加する等により具体的な説明に努めます。
様々な問題に対して、受講者が答える際に村上先生はその答えを否定することなく認めてくださり、「そういう考え方もあるね」と言ってくださること。そのおかげで、自分の考えたことを発表するの怖くなかった。そして、決まった正解があるのではなく、私なりの正解という形で導くことができた。また毎回座席がランダムで組まれているため、色々な人とコミュニケーションを取ることができた。教室の性質上、(コロナウイルス感染拡大防止の懸念もあると思うが)仕切りが多くグループディスカッションが行いづらい方だとは思った。授業でPCを用いて調べ物も行うため、場所を変えることは難しいと思うので仕方がないとも思っているが、時折コミュニケーションしづらいと感じることがあった。(改善の仕方は仕切りの高さを減らす…等としか考えられなかったです、すみません。)	
コミュニケーションの機会を設けつつ授業の質が落ちていなかった。新しいものの見方がついたので有益でした。	
グループで取り組んだことによって、さまざまな意見を聞くことができた。人の意見を聞いて、自分の考え方が変わった部分があった。	

授業改善のための学生アンケートの回答率向上と回答結果活用事例報告

付録2：2023年度「空間の利用と立地」アンケート結果（良かった点及び改善すべき点； 学生のコメントは原文のまま）

この授業の良かった点、改善すべき点について書いてください。
説明が分かりやすく、ディスカッションも定期的にあったので集中しやすかった。
将来的にも役にたつ授業でした
実践的で今後も役に立つような授業だったので、今後も学んだことを活かしたい。
資料がわかりやすかった。 また、授業内容が面白く、これからの私たちの生活に直に関係するものが多く、大変良い学びになった。
ただ教員による指導で終わらずに、個人やグループで考える時間があったことで、知識がより深まった授業だった。
講義のグループワークまでの流れが自然と事前知識を身につけられるように構成されていて非常に良い。
災害のリスクや立地の重要性について知れたこと。 将来家を買う時にどのような観点で見ればよいかわかり安全な場所を選べそうだと自信がついたこと。 先生がたくさんの考え方を教えてくれたり、質疑応答に答えてくださりとても楽しく学べる点。
日常ではあまり考えないけど実は将来とても役に立つテーマがたくさん取り扱われていたため、本当に履修して良かったと思う。
グループワークやディスカッションを通して、他の人の考えを知ることにより、自分の考えにも影響があり、より多角的に物事をみることができた点が良かったと思う。
よかった点は、グループディスカッションがベースに授業が展開されていたことです。様々なことについてメンバーで話し合うので、自分の持っていなかった視点を日々獲得することができたとします。さらに、日本における災害やリスク、防災について様々な知識を得ることができ、ニュースを見る時や街を歩く際に以前と視点が変わりました。また、スライドも英語だったので英語に触れる機会を持つことができ英語力の維持にも繋がったと思います。
身の回りで起こりうる自然災害に対して、自分たちがどのように行動できるかを学ぶことができた。 将来的に自分や家族の安全を守る知識が身についたため、良かった。 改善すべき点は特に無い。

(Endnotes)

- 1 <https://www.aoyama.ac.jp/outline/effort/fd/undergraduate/questionnaire.html>
(最終閲覧日：2024年8月28日)
- 2 https://ac.cdn-aoyamagakuin.com/wp-content/uploads/2023/12/pp_outlineeffort_fdkatsudouhoukokusho2022.pdf
(最終閲覧日：2024年8月28日)
- 3 青山学院大学「講義内容（シラバス）入稿システムマニュアル」（2023.11.17）
- 4 2023年度は、アンケート内容の変更検討のために青学の学生アンケートは実施されなかった。
- 5 https://campus.nikki.ne.jp/conts/20230403/?l-id=pc_contents_top_slider_20230403
(最終閲覧日：2024年8月28日)
- 6 <https://www.ratemyprofessors.com/>
(最終閲覧日：2024年8月28日)
- 7 https://ac.cdn-aoyamagakuin.com/wp-content/uploads/2023/12/pp_outlineeffort_fdkatsudouhoukokusho2022.pdf
(最終閲覧日：2024年8月28日)
- 8 <https://www.myu.ac.jp/academics/announcement/questionnaire/>
(最終閲覧日：2024年8月28日)
- 9 「空間の利用と立地」の2022年度及び2023年度の同一内容アンケート結果は、それぞれ以下のURLにより公開している。
2022年度（最終閲覧日：2024年8月28日）：
https://drive.google.com/file/d/1XW5qZS_HgXx5g_izgfzoz9schfYCQQAK/view?usp=sharing
2023年度（最終閲覧日：2024年8月28日）：
https://drive.google.com/file/d/12uEj_LG5UiHLMJZNRUhMPotgrkRdFaSt/view?usp=sharing

（原稿受理日：2024年9月6日）